



開館 **5** 周年記念号



目次 ● 巻頭コラム「文京区立森鷗外記念館、開館5周年に寄せて」森まゆみ(作家、編集者) / 展示会場から / ショップ便利 / カフェ便利 / 次回展示のお知らせ / コレクション展「鷗外・ミーツ・アーティスト—— 観潮楼を訪れた美術家たち」 / 特集 開館5周年記念対談「鷗外 vs. 漱石」山崎一穎(森鷗外記念会顧問、跡見学園理事) × 中島国彦(早稲田大学名誉教授) / 展示報告 / 活動報告 / これからの催しもの / 編集後記

巻頭コラム 文京区立森鷗外記念館、開館5周年に寄せて

森まゆみ（作家、編集者）

文京区立森鷗外記念館開館5周年、おめでとうございます。
 思えば、私が鷗外記念本郷図書館を使い始めてからもう半世紀以上になります。これは1962年の開館で、その頃は於菟さん、茉莉さん、杏奴さん、類さんなど、鷗外の子どもの世代の方々がお元気でした。1950年に高村光太郎や永井荷風、斎藤茂吉、佐藤春夫などの11名の著名な文学者が「鷗外記念会」を発起し、建築家谷口吉郎氏や文学散歩の創始者と言われる野田宇太郎氏などが尽力して、鷗外旧居の後に図書館併設の鷗外記念本郷図書館が作られました。鷗外に関するほとんど第一級の資料がその



まま文京区に保存された稀有な例でした。一階の鷗外記念室に気軽に立ち寄って鷗外ゆかりの品を眺めることができるのは、私の成長にとっても重要なことでした。その中でも、エリスゆかりのモノグラム、鷗外が持ち帰ったビールジョッキ、母と妻の不和に悩んだ鷗外が掲げた「資和閣」の額などが目に焼き付いています。
 1984年に地域雑誌「谷中・根津・千駄木」を創刊して以来、5号と52号で、鷗外特集をいたしました。1985年の5号の時にはまだ大正11年になくなった鷗外その人を覚えている方が町にたくさんいらしたのが、ありがたいことでした。

そうした聞き書きと、館の一級資料を存分に拝見して、私は1997年に「鷗外の坂」を上梓することができました。とはいえ、図書館利用者としては、当初、開架式ではないし、閲覧室が二階にあるなど、図書館としての不便もありました。それで記念館と図書館が分離され、回子坂上には明るく使いやすい区立本郷図書館と、重厚で気品ある区立森鷗外記念館の二つができました。

私は地域雑誌「谷中・根津・千駄木」を足掛け26年間、発行し、谷根千は地域を表す地名としてチームにもなりましたが、最初の頃、人々が多く訪れるのは谷中の側でした。それは当時の台東区が保存に熱心で、芸大内の奏楽堂、朝倉彫塑館、吉田屋酒店などを保存公開し、そこに見学ルートができたからです。しかし近年、人の流れは、鷗外ゆかりの根津神社から、敷下通り、森鷗外記念館、そして大正の近代和風を見学できる旧安田橋雄邸(都名勝)、スパニッシュ

の洋館、島蘭邸(国登録有形文化財)、さらに「フーブル昆虫館」へと千駄木の尾根伝いに伸びていきます。この道沿いにはさらに宮本百合子、高村光太郎と智恵子の旧居跡もあり、文学愛好者にとってはかけがえのない散歩道となっています。この道沿いにはあまり休むところもないので、森鷗外記念館のカフェも貴重な存在です。

開館の際、森鷗外の「青年」に出てくる町の史跡について、大変な手間をかけてビデオ収録をいただきましたが、「記念館に行ったら森さんの笑顔にあったわ」という友人知人が多く、光栄に思っています。展示、映像、学習、レクチャーなど様々な方法で鷗外に触れることができるのも嬉しいですね。

また、記念館の方々が、驚くほどの柔軟な発想で、「私がわたしであること——森家の女性たち」、「森家三兄弟——鷗外と二人の弟」、「鷗外の〈庭〉に咲く草花——牧野富太郎の植物園とともに」など、様々な角度から鷗外に光を当ててくださったっているのは、驚くばかりです。

それは「デーベス百門の大都」と言われた鷗外そのものの多彩性もさることながら、当初からの貴重な資料がすべてここに存在することを基礎にしたもので、あらためてご遺族はじめ文京区役所、森鷗外記念会の皆様方の長い努力に感謝するとともに、現在の加賀乙彦名誉館長以下、館員の皆様の活躍にも敬意を表します。ここを起点に、鷗外ゆかりの根津神社やS字坂へ、細木香以の墓のある本郷願行寺や無縁坂へ、回子坂を降りて谷中の渋谷抽斎のお墓のある感徳寺から上野の博物館へ、足を伸ばせば、鷗外

その人の歩行のあとを確かめられるのです。

残念ながら、鷗外が毎朝、うがいをする音を聞いたという隣家の酒屋は今コンビニ二エンスストアになってしまいました。回子坂の降り口に、鷗外が見たはずの古い石垣はまだ残っています。この坂上からはかつて、谷中の五重塔が見えたはずですが、それは焼失し、不意通りには今やビルが立ち並んで、谷中上野の木の梢はすっかり見えなくなっています。でもまだ、寺の境内や細い道にはいけば少しは鷗外の息遣いを感じる事ができるでしょう。

軍医総監や帝室博物館総長という官僚でありながら、明治末の国家によるフレームアップ大逆事件にあたっては、被告たちを弁護した平出修に対し該博な知識による社会主義について教示を惜みず、自らも「沈黙の塔」「食堂」などを書いた森鷗外。複雑な時代を節を曲げずに複雑に生き通した鷗外の人生は、真摯に生きようとする私たちに微笑を持って見守ってくれている気がします。

森まゆみ もり・まゆみ

作家・編集者。1984年から2009年まで地域雑誌「谷中・根津・千駄木」を創刊・編集。1997年『鷗外の坂』で第48回芸術選奨文部大臣新人賞受賞。日本建築学会文化賞、JTB紀行文学賞、紫式部文学賞などを受賞。2017年『子規の音』『暗い時代の人々』刊行。

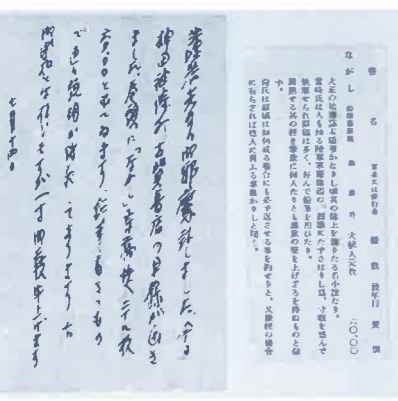
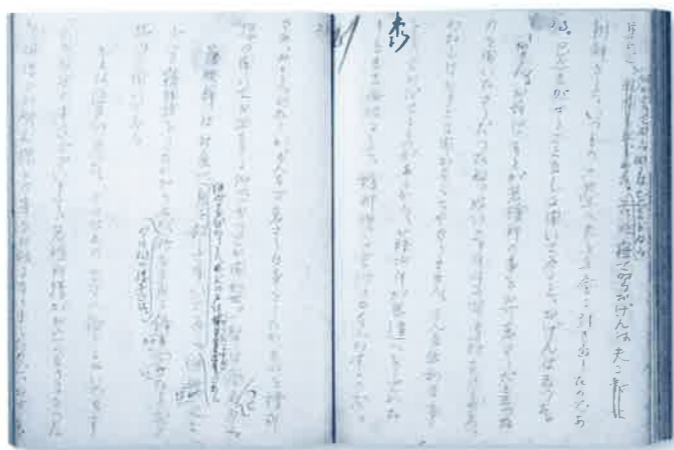


森鷗外記念館開館時のビデオ収録の様子

展示会場から

鷗外自筆原稿『ながし』

[200005]



森鷗外自筆原稿『ながし』昭和10年7月14日付

鷗外の小説『ながし』は、大正2年1月に雑誌『太陽』19巻1号に掲載され、同年7月発行の著作集『走馬燈』に収録されました。同作は、水彩画家・大下藤次郎(明治34年)を主人公とした作品で、大下の手記「ぬれきぬ」を元に書かれたことはよく知られています。
 自筆原稿『ながし』は無野の洋紙に鉛筆で書かれ、一部に朱書き訂正が見られます。原稿1枚目には国文学者・瀧田貞治(明治34年昭和21年)の蔵書印「兩山文庫」があり、瀧田の旧蔵資料であったことが分かります。また原稿と共に、鷗外の弟・潤三郎が瀧田に宛てた昭和10年7月14日付の葉書が貼りつけられています。

瀧田は近世の演劇史や俳諧史を専門とした井原西鶴研究者として知られ、同時に鷗外関連資料の収集家としても有名な人物でした(森於菟「父親としての森鷗外」)。潤三郎は書中で、「古賀書店の目録」に『ながし』原稿が掲載されていることを伝えており、これを受けて瀧田が原稿を購入したと推察することができます。

昭和4年より台北帝国大学に勤めていた瀧田は、台湾での鷗外に関する展覧会に2度携わっています。昭和8年に開催された台湾愛書会主催「森鷗外記念展覧会」では潤三郎と共に鷗外の自筆資料などを出展し、出展目録『鷗外書志』を発行。昭和14年に台北帝国大学内で開催した「森鷗外遺墨展覧会」では、鷗外の長男で同学に勤める於菟と共に資料を出展しました。潤三郎の著書『鷗外森林太郎』には、原稿『ながし』も瀧田所蔵として同展に出展されていたことが記載されています。

瀧田は昭和21年に台湾で病死し、瀧田所蔵の鷗外資料はその後於菟に譲られました。

ショップ便り

開館5周年を記念して、ショップでは新商品が一挙発売になりました！
 中でも一押しの手拭いには、鷗外自筆書簡がプリントされています。この書簡は、明治35年2月に赴任先である小倉から親友・賀古鶴所に宛てられたものです。当時鷗外は妻・志げと再婚したばかりで、鶴所のひやかしに応えたものと思われ、書中には「好い年ヲシテ少々美術品ヲシキ妻ヲ相迎へ」と謙遜とも惚気ともとれる一文があります。手拭いには、右記一文を中心に書簡の大部分がプリントされており、鷗外の気取らない一面や筆跡を楽しむことができます。

また、小サイズのクリアファイルや、『沙羅の木』の詩歌が刻まれた鉛筆、一筆箋やポストカード、Tシャツもラインナップに加わって、どれを購入するか迷ってしまうかも……。
 ご来館の記念や贈りものにも、是非お買い求めください。



「沙羅の木」えんぴつ 90円



鷗外Tシャツ(男女兼用 M、Lサイズ) 2200円 ※写真はバックデザイン



A5サイズクリアファイル(4種) 各300円
 A4サイズクリアファイル(1種) 400円



一筆箋(2種) 各400円

鷗外書簡手拭い 1000円



ポストカード(8種) 各100円

※値段はすべて税込価格です。

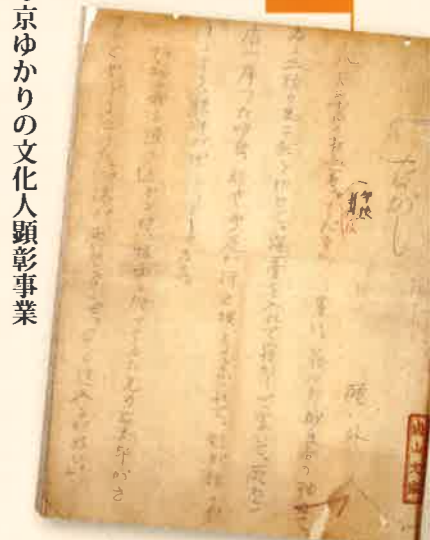
カフェ便り

この冬モリキネカフェでは、甘いホイップクリームを添えたウインナ・コーヒーが登場します。
 「ウインナ」とは「ウイーン風」という意味で、ウイーンは鷗外も留学中に一時滞在したことがある地です。寒い冬にぴったりのホットドリンクをお試しください！
 ウインナ・コーヒー 500円



展示のお知らせ

鷗外・ミーツ・アーティスト — 観潮楼を訪れた美術家たち



鷗外自筆原稿「ながし」
大下藤次郎の手記を元に書かれた小説。

会期 2018年
1月13日(土) — 4月1日(日)
〔会期中の休館日〕 2月26日(月)、27日(火)、
3月27日(火)

会場 ● 文京区立森鷗外記念館 展示室2
開館時間 ● 10時〜18時(最終入館は17時30分)
観覧料 ● 一般300円(20名以上の団体:240円)
※中学生以下無料、障がい者手帳ご提示の方と同作者1名
まで無料/※文京ふるさと歴史館入館券、パンフレット(押
印入)、友の会会員証ご提示で2割引/※その他各種割引
がございます。詳細は記念館HPをご覧ください。

関連事業のお知らせ

展覧会期間中に関連講演会を予定しております。申込方法は8頁をご覧ください。

「鷗外が嘱望した洋画家 藤島武二」

講師 児島薫氏(実践女子大学教授)
日時 2018年2月24日(土)
14時〜15時30分

会場 文京区立森鷗外記念館2階講座室
定員 50名(事前申込制)
料金 無料(参加費と本展の
観覧券(半券可)が必要)
申込締切 2018年2月9日(金) 必着

ギャラリートーク

展示室にて当館学芸員が展示解説を行います。
2018年1月24日、2月7日、28日、
3月14日
いずれも水曜日14時〜(30分程度)
申込不要(展示観覧券が必要)

★鷗外作品のブックデザインを楽しむ!

2018年3月21日(水・祝)
11時〜(30分程度)
※コレクション展 常設展に展示中の鷗外
作品装丁本を紹介。

同時開催

ミニ企画展示
「父への想い」森於菟紹介」
2017年に没後50年を迎えた鷗外の長男、
森於菟の資料を展示します。

会場・文京区立森鷗外記念館 展示室1
※コレクション展開催中のコーナー展示
です。通常観覧券でコレクション展
とともにご覧いただけます。



第一回文展審査員
明治40年10月21日〔推定〕
後列左から久米桂一郎、4番目 岡田三郎助。
前列左から2番目 中村不折。前列右 鷗外。

宮方平 (歌)

ドイツ留学中、洋画家・原田直次郎との出会いに始まる鷗外
の美術への関心は、鷗外を美術批評の場に立たせ、美術家たち
との交流を広げるきっかけとなりました。美術家たちにとって
鷗外は、厳しい批評者であると同時に良き理解者でした。一方、
鷗外にとって美術家たちは、仕事仲間であり創作の源泉となる
存在でもあったのです。

鷗外と交流のあった美術家たちの中から、鷗外の居宅・観潮
楼現・文京区立森鷗外記念館を訪れた美術家に、100年以上
上の時を経て再び集まってみましょう。鷗外が作品を評価
した洋画家・藤島武二、鷗外作品のモデルに
なった水彩画家・大下藤次郎、東京美術学校
で鷗外の講義を受けた彫刻家・高村光太郎、
鷗外著書の装丁を多数手がけた洋画家・長
原孝太郎……。美術界における旧派と新派、
あるいは明治美術会から白馬会、太平洋画
会との価値観がせめぎ合う中で、鷗外は彼
らにどのような眼差しを向けてきたので
しょうか。そして美術家たちの眼は鷗外
とその作品に何を発見したものでしょ
うか。観潮楼に届いた美術家たちの書簡、
鷗外旧蔵の美術品、鷗外作品を彩った
装丁本などを通して、「鷗外が見つめ
た美術家」と「美術家が見つめた鷗外」
に迫ります。



- 1 大下藤次郎筆 鷗外宛 葉書
明治40年1月1日
- 2 平福百穂《鷗外博士》短冊
(久保田万太郎句)
- 3 高村光太郎《観潮楼安置大威徳明王》
「スバル」10号 裏表紙 復刻版
明治42年10月
- 4 ハウトマン著、鷗外訳『寂しき人々』
明治44年7月
装丁は藤島武二による。

特集 開館5周年記念対談 「鷗外 vs. 漱石」 山崎一穎 × 中島国彦



中島国彦氏 山崎一穎氏

11月11日 文京区民
センターに会場を移
し、開館5周年記念
対談「鷗外 vs. 漱石」を
開催しました。鷗外研
究者である山崎一穎
氏と、漱石研究者で
ある中島国彦氏にご
登壇いただき、鷗外・
漱石に関していくつ
かのテーマに沿って
お話しいただきまし
た。内木明子氏によ
る『青年』『三四郎』の
朗読も行い、大勢の
参加者が3名の共演
を楽しみました。

対談の様子をダイ
ジェストでお送りし
ます。

山崎 人が背負って、この世に生まれてく
るもの、それは漱石、鷗外それぞれの人生
あるいは文学にどんな風に関わってきたの
でしょうか。

中島 漱石の場合は、新宿の馬場下という、
その先は郡部という微妙な所で育ちました。
町人でもまとめ役の名主で、お父さんも教
養があつて、例えば一中節なんかの練習も
していた。その末っ子で、養子にも出され
ましたが、残念ながら立派なお兄さんが若

くして亡くなって、結局はまた夏目家に戻
される。「硝子戸の中」を読むと、やっちゃ
場があったり、小さな寄席があったり、そ
して江戸川(神田川)まで本当に周りに何も
ない。隣の小倉屋さんの御北さんが長唄の
勸進帳の「旅の衣は篠懸の」などと唄うと、
それをじつと聞いている。そういう雰囲気
の中で、幼少期の感受性を育ててゆく。家
の中の立場の複雑さや時代の微妙な中で
育ったそういう感じというものを、考えて
ゆくことが必要かもしれません。

山崎 鷗外は津和野藩の御典医の長男です
ね。山野の草花を愛するような柔らかな感
性を持っている。ところが家の期待はそう
いうものではなくて、祖父の代で馬廻役か
ら徒士役に降格された森家の再興の夢を一
身に背負って生きざるを得なかった。蒲校
へ行っても秀才の道を歩む「風と云ふも
のを揚げない、独楽と云ふものを廻さない」
そんな少年でした。母親は字が1字も読め
なかつた人です。ところがいるはから習っ
て鷗外の予習復習の相手をした。仮名付き
の『論語』があるんです、お母さんが使った。
私は鷗外の蔵書にそれを見た時、やっぱり
涙が出るほど感動しました。鷗外はこれを
持っているんですよ。そういう意味ではま
さに母との関係はべつたりです。

中島 漱石の場合はお母さんと比較的若い
時に死に別れます。「千枝」という母の名前
のその音がとても印象的でもう他に千枝と
いう人はいないんだ、お母さんだけだと、
こんな風に言い切る。そういう形での母と
の関係は、また鷗外とは違った肉親とのつ
ながりがあるんですね。当時の学問環境で
は『道草』にも文字が十分でない「無筆」と

いう言葉が出てきて、やはり時代の雰囲気
を感じさせると思います。その中で、とも
かく勉強することが当時の若者の一つの在
り方だったろうと思います。

言葉の骨格は漢文学から

山崎 9つまでの間に鷗外は『四書五経』更
に『左伝』『国語』『史記』『漢書』まで漢文学
読を全部やった。上京して、依田学海、佐
藤広策という漢学の先生に就いております。
軍人になつてからもずっと漢詩をやりとり
しているし、そして桂湖村に教えを受けて
います。文章の骨格が漢文学から生まれた
と思います。漱石は英文学の方へ進むし、
鷗外はドイツ医学の方、つまり和魂洋才、
2人とも日本人の心とヨーロッパの文化文
明を両方とも体験している所である意味で
似ているわけですね、生き方が。

中島 漢文学に支えられた言葉の骨格、「格」
というものが明治の文学者を考える時に大
事だろうと思います。漱石も当時の教養の
ある人として二松学舎で学ぶ。英文学も学
びますが、言葉の骨格というものに對する
センスを、若い人が随分勉強したのだと思
います。漱石は漢詩を上手に書きます。同
年代の子規もたくさん漢詩を作っています。
あの世代まではごく普通ですよ。

対照的な留学体験

山崎 鷗外はマルセイユの港の街灯の、雨
の中その煌々とした明るさ、光、それを「月
が見えるようだ」と漢詩で詠み、驚きを持っ
てヨーロッパへ入ります。東京大学の時代
までの読書傾向を見ると、才子佳人の物語
詠史といった当時の若い青年らしいものや

読本と人情本も読んでいるんですね。それ
が、ドイツへ行っているんな人にも誘われ、
様々な体験をして、だんだん自分が「オルフ
エウス」のようなオペラの訳文を書いてゆく
ように成長していきます。

中島 漱石の場合はロンドン体験ですが、
その前にパリ万博を見学します。エッフェ
ル塔に登り、できたばかりの地下鉄1号線
にも乗っています。びっくりするような1
週間で、パリで、その前でイタリアでも
シヨックを受ける。するとその反動で、ロ
ンドンのイメージが暗い、という形になる
のです。生活の中で勉強が第一になって、
人間関係よりはともかく本を読むより仕方
がない。じつと自分だけの世界に閉じこも
って、自分で勉強するわけです。唯一のほけ
口は美術館へ行つて絵を見ることくらい。
それから、池田菊苗のような友達とおしゃ
べりするくらい。鷗外の留学生活とは確か
に対照的だと言えますね。

山崎 鷗外は独身で、漱石は結婚している
わけで、違いが当然あるでしょうね。鷗外
の留学は伸びやかなもので、よく遊びよく
学んでいます。ミュンヘンでは原田直次郎
と会って絵画、ライプチヒではオペラ、音
楽の方です。そして最後にベルリンに戻っ
て来た時に『舞姫』のエリスのモデルになっ
たエリーゼ・ヴァイゲルトという女性とこ
こで会ったろうと思いますね。

作家への道

中島 『舞姫』は山崎さんも力説しているよ
うに、自伝ではなくてあくまで物語ですの
で、モデルの人がいても作中に描かれてい
る女性との距離が全然違います。その距離



上：展示室1 下：展示室2

展示報告

開館5周年記念・文の京ゆかりの文化人顕彰事業 特別展『明治文壇観測——鷗外と慶応3年生まれの文人たち』 会期：2017年10月7日(土)～2018年1月8日(月・祝)

本展では、今年生誕150年を迎えた慶応3年生まれ—夏目漱石、幸田露伴、尾崎紅葉、正岡子規、齋藤緑雨、三木竹二(鷗外の弟・篤次郎)—と鷗外との文学交流を、鷗外主宰雑誌『めざまし草』(明治29～35年)を座標軸に辿りました。

第一章は「めざまし草」前史として、明治20年代の文学を紹介しました。日本近代文学創世期の勃興を象徴するように、坪内逍遙・二葉亭四迷・鷗外・紅葉、露伴などの著作を隙間なく展示しました。第二章は「めざまし草」の時代と称し、慶応3年生まれと鷗外の交流とともに「めざまし草」の主な構成内容を紹介します。子規一門の俳句が目立つ詩歌欄、鷗外による美術批評や美学の翻訳、竹二の活躍の場となった演劇評、そして露伴、緑雨、紅葉などが関わった「三人冗語」「雲中語」などの新刊作品合評……。な

内木明子氏(朗読家、早稲田大学・相模女子大学講師)



鏡のように見ているような感じがします。

山崎 鷗外はナウマンとの論争で、ヨーロッパ文化の優れている所は「自由と美」だと、そういう精神的な言い方をすると、ただ「自由と美」というもので行くと、どうやって日本の社会の中でぶつかっちゃうんです。その鷗外の、苦しみと悲しみみたいなものが、私は鷗外文学の中にあるという風に見るんですよ。やっぱり腹立つことがある。いろんな所に近代的な提言をして受け入れられない。全部否定されているんです。だけどそれで最後に行きつく所がなくなってしまうんです。漱石にだって恐らくヨーロッパ体験があつて、つまり「現代日本の開化」などを見ていて怒りがありますね。一番驚くのは『三四郎』の中で日本は「滅びるね」と、あれよく検閲に引つかからなかったんだ。

2人の文学が挑戦したもの

中島 『吾輩は猫である』を書いた後、『坊っちゃん』『草枕』『二十日』などが半年の中で同じ人から生まれる、つまりそういう幅の広さですね。漱石の中にもいろいろあるものがあるということです。これは漱石一人の人において考えるよりも、日本の近代文学の中にそういった様々なものがあるような時代をやっとたどり着いた、と考える方が良くのかもしれない。日本の近代文学が様々なものを手に入れて、それがどう組み合わせられているかということ、私たちは万華

かでも観覧者を圧倒したのは、『めざまし草』収録 批評作品「一覧」パネルです。鷗外が「めざまし草」誌上で批評した文学作品をすべて抽出したもので、その数に驚かれる方も多くいらっしゃいました。第三章は「めざまし草」以後、鷗外の文壇復帰までを展覧しました。子規、紅葉、緑雨の死、日露戦争、漱石の登場という変遷に続いて、鷗外は再び筆を執り、豊熟の時代へと向かうのです。鷗外と慶応3年生まれとともに明治文壇を観測して再確認できたのは、流れゆく時代のどの時期にもどの分野においても、鷗外の名が見えることでした。深い教養と広い視野で、近世の雰囲気を中心に留めつつ近代と並走してきた鷗外は、それ故に「文豪」と称されるのかもしれない。

明治という時代を見つめて

山崎 それは明治天皇が亡くなって、乃木が殉死をしているという所にやっぱあるんじゃないだろうか。当時は乃木殉死をもうみんな賞美しています。そういう中で鷗外は、あの潔さはいったどこから来ているのかと、日本及び日本人の原点を探ろうとして武士社会の時代へと考察を進めてゆく。殉死の実例を調べてゆくと、実は賠償と報恩というつまりお金の関わりになって、きれいな事に行かないんですよ。結局男どもは武士社会、組織の中で私をなかなか生かせない。そういう所で言うところの女性の方が潔い。つまり歴史小説の中に出てくる女性たちが深いんですよ。鷗外はそこも発見していきんですよ。ある過酷な運命を英知で切り開いてゆく、しかもある献身という女性像です。それが『山椒大夫』『安寿』『最後の一句』のいちになってゆくのだと思うんですよ。一方漱石は「こころ」の中で「明治の精神」と言っていて、逆にそこで現代へと、現代人の持っているエゴとさびしみみたいなものへと進んでゆく。

中島 実は一番難しい所ですね。「こころ」で、「明治の精神」「自由と独立と己れとに充ちた現代」と書いてあるのですけれど、中

活動報告

森鷗外記念館ではこの秋、連日わたって開館5周年記念イベントを開催しました。開館記念日である11月1日に実施したセレモニーには、煙山前文京区長やドイツ・ベルリン森鷗外記念館のヴォンデ副館長らが出席。当館の開館を待ち望み、またこれまでの活動を見守ってくださった皆様と、5年間を振り返る機会となりました。関係者、来館者問わず広く応募した応援メッセージも数多く集まり、温かい声援をいただきました。イベントや展覧会にご参加いただきました。大勢でつくりあげる5周年でした。

2018年1月には、5周年記念事業を締めくくるシンポジウム「深読み! 森鷗外——鷗外とビグマリオン・コンプレックス」と、登壇者の一人である菅実花氏の展示を行います。詳細は8頁をご確認ください。

10月5日
記念バッジ、モリキネカフェ記念コースター作成。

10月7日～11月11日
全国各地から応援メッセージが寄せられました。展示は11月30日まで実施。↓a

10月29日～11月2日
これまでの展覧会を振り返るポスター「展示5周年のあゆみ」開催。↓b

11月1日
開館5周年記念セレモニー&鏡割りを実施。11月の1ヶ月限定で、導入展示室の鷗外胸像と記念撮影が可能に。↓c
本郷郵便局の協力で、オリジナルの郵便小型印を制作。館内にも数日間、出張郵便窓口を設けました。↓d



11月2日
文の京ハートフル工房が出店、手作りパンや手芸品の販売を行いました。↓e



11月3日
アーティスト森ナナ氏による書パフォーマンス「スライプ」を開催。↓f



11月4日
ライアー奏者三野友子氏による演奏は、ドイツの楽曲からお馴染みの曲目まで。↓g



11月5日
ベルリン森鷗外記念館副館長ベアテ・ヴォンデ氏の来日講演が実現。↓h



身が何か、答えはありません。ただ、明治という時代をしっかりと見据えなくてはいけないというその強烈なモチーフがやはり漱石の中にあつた。「記憶して下さい。私はこんな風にして生きて来たのです。」つまり一人の個人の「生きて来た」という姿に「明治の精神」という言葉を結びつけようとした。これで「明治の精神」とは何かということとは解決できないのですけれども、何か、ある問題をじつと抱え続けるということ、これがどこかでつながっている、と思いついて説明してみたいと思います。山崎さんの話を聞くと、作品をただ読むのではなくて、やはり作品を書いて支えてきた文学者のその人間の核のようなもの、それを考えながら読んでいくと面白く読めるんだなということとを改めて感じる事ができました。

山崎 今日の中島さんの話が何かのきっかけとなつてもう一遍、漱石と鷗外、広く日本の文学作品を読んでいただけたらありがたいと思います。

中島国彦
なかじま・くにひこ

早稲田大学第一文学部国文学専修卒業。早稲田大学大学院文学研究科博士課程修了。博士(文学)。1970年早稲田実業学校教諭、1972年早稲田大学文学部助手、1976年専任講師、1979年助教授、1984年教授(のち文学学術院教授と呼称変更)。現在は、公益財団法人日本近代文学館専務理事、全国文学館協議会幹事長、岩波書店版『白秋全集』『荷風全集』編集委員などをつとめる。

山崎一穎
やまざき・かずひで

早稲田大学教育学部国語国文学科卒業。千葉県立船橋高校教諭として夜間定時制課程に8年間勤務。この間、早稲田大学大学院文学研究科修士課程、博士課程で学ぶ。博士(文学)。1970年4月、学校法人跡見学園女子大学文学部国文学科の専任講師となる。助教授、教授を経て、学長に就任(1978年から1989年)。再度学長に就任(1998年から2006年)。跡見学園中学校高等学校校長に就任(2007年から2012年)。現在は他に、森鷗外記念館(津和野)館長、公益財団法人日本近代文学館理事、全国文学館協議会会長などをつとめる。

「編集協力」伊澤貴美

催しは◎以外は全て事前申込制です。各申込締切日必着でお申込みください。詳細は、チラシやHPをご覧ください。当館までお問い合わせください。

★応募多数の場合抽選とさせていただきます。
★悪天候等やむを得ない事情により、日程・講師・内容を変更する場合があります。

2017年12月20日(水)～2018年1月31日(水) 10:00～18:00

「文豪ストレイドッグス × 文京区 ～文豪の街・文京区スタンプラリー&イラスト展示～」◎

会場：エントランス、モリキネカフェ

人気漫画作品『文豪ストレイドッグス』とコラボレーションしたスタンプラリーとイラスト展を実施。森鷗外記念館ではモリキネカフェをイメージした描き下ろしイラストや、原作イラストの展示を行います(休館日は除く)。詳細は文京区HPをご覧ください。[主催：文京区]

1月19日(金) 10:00～17:30

鷗外誕生日記念行事◎

鷗外の156回目の誕生日を記念して、展示会を無料でご覧いただけます。

2月2日(金)～2月14日(水) 10:30～17:30
(※最終日は15:00まで)

フリユウ・ギャラリー「はらゆうこ展」◎
×モリキネカフェ

出展：はらゆうこ氏(アーティスト) 会場：モリキネカフェ
フリユウ・ギャラリーで行われた「谷根千マッピング」展で、当館を描いた作家・はらゆうこ氏の作品を展示します。
[協力：フリユウ・ギャラリー]

2月17日(土) 13:30～15:00

文の京ワークショップ
「みみずくドローイング」◎

会場：講座室 料金：無料 定員：20名
鷗外が描いたみみずくのドローイングを真似て描いてみましょう!

1月20日(土) 13:30～16:00

開館5周年記念「深よみ!?森鷗外
シンポジウム ——鷗外とピグマリオン・コンプレックス」

講師：島村輝氏(フェリス学院大学教授)、藤木直実氏(日本女子大学非常勤講師)、
菅実花氏(東京藝術大学先端芸術表現専攻博士後期課程)
会場：講座室 料金：500円 定員：60名
申込締切：1月4日(木)必着 ※メール申込のみ 1月11日(木)必着
ピグマリオン・コンプレックスを可視化したともいえる菅実花氏の作品を手がかりに、島村輝氏と藤木直実氏が鷗外を新たな視点で読み解きます。

1月13日(土)～1月28日(日) 10:00～18:00

開館5周年記念シンポジウム「The Silent Woman」◎
関連ミニ展示

出展：菅実花氏(東京藝術大学先端芸術表現専攻博士後期課程)
会場：講座室 料金：無料
※上記シンポジウム開催日(1月20日)は、展示の一部をご覧になれません。

2月24日(土) 14:00～15:30

展示関連講演会「鷗外が嘱望した洋画家藤島武二」

講師：児島薫氏(実践女子大学教授) 会場：講座室
料金：無料 ※要本展観覧券(半券含) 定員：50名 申込締切：2月9日(金)必着

◆◆上記イベントの申込方法◆◆

事前申込制のイベントは、各申込締切日までに下記のいずれかの方法でお申込みください。申込みは、1通につき1名様(はがき・Eメールどちらかお一人様1通まで)、応募者多数の場合は抽選とさせていただきます。申込締切後1週間以内に抽選結果をお知らせします。

- ①往復はがき 往信に参加希望プログラム名・日程・氏名(ふりがな)・住所・電話番号、返信用には、住所・氏名を明記の上、〒113-0022 東京都文京区千駄木1-23-4 文京区立森鷗外記念館イベント係までご応募ください。 ※日中に連絡が取れる電話番号をご記入ください。
- ②Eメール 件名に参加希望プログラム名・日程・本文に氏名(ふりがな)・Eメールアドレス・電話番号を明記の上、bmk-event@moriogai-kinenkan.jp までご応募ください。 ※参加可否のご連絡をEメールでいたします。当館からのEメールが受信可能なEメールアドレスをご記入ください。受信制限が設定されている場合、当館からのEメールを受け取れないことがありますので、あらかじめご確認のうえ送信ください。 ※日中に連絡が取れる電話番号もしくはEメールアドレスをご記入ください。

[ご提供いただきました個人情報は、個人情報保護法に基づき適切に管理し、当該プログラム以外の使用はいたしません。]

編集後記

鷗外でつながる——。

おかげさまで、文京区立森鷗外記念館は開館5周年を迎えました。冒頭の言葉は、当館が掲げた開館5周年のテーマです。5周年を彩ったのは、特別展「明治文壇観測——鷗外と慶応3年生まれの人々」のテーマカラーと同様、ビビッドな黄色が目を引き記念ロゴマークでした。このロゴマークは、当館が2012年11月に開館する前に行われた鷗外生誕150年記念事業で使用されたロゴデザインを踏襲しています。

当館では開館記念日に先立ち、ロゴマークを配した記念バッジ(非売品)を作成しました。記念館スタッフや区職員だけでなく、本郷図書館や地域活動センターのスタッフの皆様、森鷗外記念会の先生方や近隣の方々などに配布し、皆様に「森鷗外記念館アンバサダー」になっていただき、5周年を盛り立てました。時を越え、場所を越えて、まさに「鷗外でつながる」5周年でした。

表紙の写真は、2017年11月1日開催、開館5周年記念セレモニーの様子。
写真左より、長谷川隆千駄木町会長、宮内秀和津和野東京事務次長、池永紳也北九州市東京事務所長、ベアータ・ヴォンデベルリン森鷗外記念館副館長、煙山力前文京区長(現・文京区社会福祉協議会会長)、小森谷雅弘文京区千駄木2丁目商店街振興組合理事、高橋毅彦汐見地区町会連合会会長、今村純子当館長。

交通案内



●電車をご利用の場合

- ・東京メトロ千代田線「千駄木」駅 1番出口 徒歩5分
- ・東京メトロ南北線「本駒込」駅 1番出口 徒歩10分
- ・都営三田線「白山」駅 A3番出口 徒歩15分

●バスをご利用の場合

- ・都バス 草63番系統「千駄木一丁目」下車 徒歩1分
 - ・都バス 上58番系統「団子坂下」下車 徒歩5分
 - ・Bーぐる千駄木・駒込ルート「18特別介護老人ホーム千駄木の郷」下車 徒歩5分
- ※一般の駐車場がございませんので、公共交通機関をご利用ください

〒113-0022 東京都文京区千駄木1-23-4 TEL: 03-3824-5511
URL: <http://moriogai-kinenkan.jp>

開館時間 10:00～18:00(最終入館は17:30)

休館日 毎月第4火曜日(祝日の場合は開館、その他例外あり)、
年末年始(12月29日～1月3日)、及び展示替期間、煙蒸期間等

ogai
マ
文京区立
森鷗外記念館
Mori Ogai Memorial Museum